

国際日本研究センター 海外大学・機関 調査表

訪問先	チューリヒ大学
調査日時	2011 年 11 月 25 日、26 日
調査対象機関・学科・個人名	チューリヒ大学 東洋学科・日本学 (Universität Zürich, Ostasiatisches Seminar – Japanologie) http://www.ostasien.uzh.ch/japanologie.html 日本学教員のうち、とくにダニエラ・タン研究員、シモーネ・ミュラー准教授、ギド・ゲフター研究員から話を伺った。
訪問目的	1. チューリヒ大学東洋学科における日本学の研究・教育の現状に関する聞き取り調査 2. 東洋学科・日本学の施設の視察 3. チューリヒ大学における日本学の授業の視察
調査日程	11 月 24 日 (木) (移動日) ITP プログラムによる出張でこの日までヒルデスハイムに滞在しており、ヒルデスハイムからハノーファー経由でチューリヒへ 11 月 25 日 (金) (1) 8:00-9:45 ギド・ゲフター研究員による「日本語現代文読解入門」の授業視察、授業前と終了後にゲフター氏と面談 (2) 10:15-11:15 マリコ・フォントベル教員による「現代日本語読解」の授業視察 (3) 11:30-14:30 東洋学科にあるダニエラ・タン研究員の研究室訪問、東洋学科図書室視察 ・東洋学科の図書室のうちとくに日本学関係の書架、施設を見学。 ・その後、シモーネ・ミュラー准教授も交えて、チューリヒ大学（さらに

	はスイス全体における) 日本学の研究・教育状況における面談を行った。 日本学の教育状況に関しては詳細な資料を入手した。 ・交換留学の状況に関する情報交換を行った。 ・また、東京外国語大学の国際日本研究センターの資料を改めて手渡し、センターの組織と活動に関する説明を行った。 11月26日(土) 10:00-13:00 チューリヒ市内でダニエラ・タン研究員と面談。相互に学生の留学に関して、さらに詳細な情報交換と協力依頼を行った。
調査結果	【チューリヒ大学の日本学の制度的特徴】 チューリヒ大学の東洋学科(Ostasiatisches Seminar)は、メインキャンパスの中央講義棟に比較的近いところに位置する独立した建物全体を占めている。東洋学科には、「日本学」と「中国学」が含まれているが、「日本学」には、現在、クリスティアン・シュタイネック教授(日本思想史)とダヴィッデ・キアヴァッチ教授(社会学)の二つの教授ポストが置かれ(この二人の日本学主任教授は今回出張中のため面会できなかった)、それ以外に全部で9人のスタッフ(准教授・研究員・助手)と退職されたエドゥアルト・クロッペンシュタイン教授が、日本学の研究・教育体制を支えている。現在、「JLPP 翻訳コンクール」の審査員も務めるクロッペンシュタイン教授が数年前に退職されるまでは、日本学の教授ポストは一つしかなかったが(シュタイネック教授が後任)、その後もう一つ増やされ(キアヴァッチ教授が着任)、そしてそれ以外のスタッフも増員して、現在にいたっている。つまり、チューリヒ大学の日本学は、全体としてますます力を拡大しつつ方向にあるといえる。このことは、ドイツにおいて中国学が拡張するのとは対比的に、日本学がいくつかの大学で統合され、明らかな縮小傾向にあるのとは明確に異なる。似たようなことが、オーストリアのウィーン大学の日本学でもあてはまる。ドイツではある程度の数の大学で日本学専攻が存在するのに対して、オーストリアではウィーン大学が唯一の日本学を有する大学であり、スイスではドイツ語圏に関してはチューリヒ大学がやはり唯一の日本学の研究・教育を行う大学である。ウィーン大学の日本学と同じように、チューリヒ大学の日本学も、充実した設備とスタッフの配置を確認することができた。(ちなみに、現在教授ポストにあるシュタイネック教授とキアヴァッチ教授がそれぞれ文化学と社

会科学の主軸を占めているが、言語学についてはゲフター研究員が中心となっている。今回、おもに面談を行ったもう一人のスタッフ、シモーネ・ミュラー准教授は、シュタイネック教授とともに文化学の担当だが、彼女は 20 年以上前に東京外国語大学で 2 年間学んでいる。）

スイスでは、ドイツ語圏に関してはチューリヒ大学、フランス語圏に関してはジュネーブ大学に日本学があり、ともに本学の提携校となっているが、ドイツ語による日本研究とフランス語による日本研究では、かなり方向性が異なるようだ。

【学生について】

日本学を専攻する学生は、主専攻と副専攻を合わせて、当初の人数は（授業が進むにつれ次第に減少してゆく）年間で 60 人ほどの規模ということで、今回視察した二つの日本語の授業では、1 クラスが 25 名程度だった。日本学を専攻しようとする学生のモチベーションはさまざまのようだが、他国の例にもれず、マンガやアニメの影響で日本語を学習したいと考える学生はやはり多いようだ。（ゲフター氏によると、学生の日本語には、ときおりマンガの世界の言葉が奇妙に混入することもあるようだ。）ゲフター氏の授業では、おもに 3 セメスター目の学生が、池澤夏樹『マリコ／マリキータ』を素材にして、ドイツ語で日本語のテキストを解釈していた。日本語を学習し始めて 2 年目の学生にしては、かなり正確に日本語の文章を理解しているという印象を受けた。

【留学に関して】

チューリヒ大学日本学では、現在 5 つの提携大学があり、希望する学生を適宜振り分けて日本の大学に派遣している。本学には、協定を結んだ 2006 年以降、コンスタントに 2 人ずつの学生（計 10 人）を派遣している。本学からは、この 5 年間でまだ計 3 名の学生しかチューリヒ大学に留学していないが、それはチューリヒの方言に対して本学の学生が懸念を抱いているためである。この点については、面談を行ったタン氏、ミュラー氏からも理由について質問があったが、方言に対する懸念という説明に納得しながらも、大学の中では基本的に標準ドイツ語が用いられているので、心配はないというコメントがあった。そのことについては、同様の感触を調査担当者も得た。

調査担当者： 山口裕之



グイド・ゲフター研究員の
授業風景（中央講義棟）



マリコ・フォントベル教員の
授業風景（中央講義棟）



東洋学科の建物の中にある図書
室。日本学の司書の方のいる部
屋。



東洋学科の建物の中にある図書室。司書の方（左）と調査担当者。



今回の面談で一番お世話になったダニエラ・タン研究員。
（東洋学科の建物の中にある図書室で）



東洋学科の図書室は、3つのフロアを占める



チューリヒ大学メインキャンパスの中央講義棟正面入り口